
Break Time

ぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Break Time

【Nコード】

N2644F

【作者名】

ぐり

【あらすじ】

蓮川君と瞬が211号室の前を通りかかると、何やら怪しい雰囲気
気が…

ここはGW。211号室に珍しく来客が居ない。

「今晚は静かだな」

読みかけの本を置いて忍はしみじみと言った。

「そうだな」

そこまで答えて、ふいに光流は口は噤んだ。

「どうした？」

「忍、今晚は二人きりだな」

「そういう事になるな」

光流の何かいいたそうな表情に気付かぬ振りをする。

「たまには静かな夜も良いじゃないか」

「あのさっ…」

「どうした。言いたい事があるのなら言えよ」

「あれをだな…」

「してほしいのか？」

「うん…無理にとは言わないけどな」

光流の口調は珍しく齒切れが悪い。

忍はこれ以上本を読むのを断念した様子で本棚に本を戻した。

「して欲しい事があるのなら、素直に言ったらどうなんだ。俺は別に構わないぞ。他の奴は居ないし、こんな機会はそうそう訪れるものじゃないしな」

「それなら言うが、実は…してほしいんだ」

そんな様子を余裕の笑みで返す忍。

「来いよ」

「此処でか？」

「そうだ、早く此処に来て横になれ」

「床の上じゃ体が痛くなるだろう」

「我儘な奴だな。どこならいいんだ」

「やっぱ、ベッドの上がいんじゃないかねえか」

「暗いだろう。暗いと良く見えないから嫌なんだが」

「電機点ければ良い話だろう」

蓮川は並んで歩いていたら瞬に黙るように身振りで示した。

「どうしたの？」

小声で瞬が聞く。二人が居るのは211号室の前。蓮川は何も言わず黙ってドアに耳を押し付けた。瞬もそれに倣う。

中からは微かに声が聞える

「光流、動くな。動けば痛い思いをするぞ」

「だってよお」

「いくら俺が上手いと言っても、痛くしない保証は出来ないからな」
「分ったよ」

廊下には無言で顔を見合わせている蓮川と瞬。部屋の中ではゴソゴソと微かな気配がしている。

「ほらっ、向こう向けよ」

「痛てえ」

「お前が動くからだ」

「もうちつと優しくしてくんねえかなあ」

「やれと頼んだのはお前だろう」

「それはそうだけど」

「だったら文句は言うな」

「へいへい」

「素直にしていれば、いいんだ」

「あゝ、そこそこ」

「二段ベッドの下はどうしてこう狭いんだ」

（これ以上は自主規制）存分に想像力を膨らませて下さい。

廊下の二人は小声で囁く。

「先輩達って、そういう関係だったの？」

「まさか…」

「こうなったら、確かめるしかないよね」

お互いに頷き一気にドアを開けた。

「先輩！」

横になつていた光流が身を起す。

「二人で一体何をしていたんです」

興奮してワナワナと震えている蓮川を瞬が引つ張る。

「スカちゃん、何か違うよ。だって二人とも服着てるし」

「蓮川あ。お前俺達が何をしていたと言いたいんだ」

「何をしていたんですか？」

「忍に耳掃除して貰ってただけだぞ」

「何で耳掃除なんてしてもらうんですか。自分ですれば良いじゃないですか」

「忍は手先が器用で上手いんだよ。お前も一度して貰えよ。すんげえ気持ち良いから。もう病み付き」

「おつ、俺は耳掃除くらい自分で出来ます」

「それに忍先輩がただで何かしてくれる筈ないしね」

「瞬。良く分っているじゃないか」

「あゝあ、何か損した気分。馬鹿らしいスカちゃん帰ろう」

部屋に戻った時に、蓮川はハタと気付いた。

「またあの二人にハメられたんだろうか」

「まさか」

「でもあの二人なら…」

「そうだね。あの二人なら」

「忍、面白かったな。あの時の二人の顔」

「まあな」

「手塚屋、お主も悪よのお。二人が立ち聞きしているのを知っていて、ワザと意味深な言葉を使いおって」

「そう言うお前もな。悪乗りしていたじゃないか」

「そりゃあ、絶好の機会だったからな。最近蓮川の奴警戒心が強く、いじめる機会に恵まれなかったから、久々に燃えちゃったよ、俺は」

「喜んでないで、良いのかこのままで。まだ仕上げが残ってるんだがな」

「そうだった。忍早い所頼むわ」

「あんまり嬉しがって笑い出すなよ。耳の中は顔と違って治りが人並みなんだろう」

夜が更けた緑林寮に蓮川和也の声が響き渡った。

「先輩達なんて、大ッ嫌いだあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2644f/>

Break Time

2010年12月25日14時38分発行